



題字：萩原正大  
表紙用 AI データ化：シーエルデザイン 石井明夫様

## 日本文化の形成発展と未来 ——雑誌『たね』刊行に寄せて——

今年の2月、日本民俗学の祖である柳田國男先生の未発表書簡が2通見つかったとのニュースが飛び込んできた。その2通目において、柳田先生は『<sup>こししま</sup>離島昔話集』再刊の意義を「大戦後、ほとんど絶滅に近くなった民間伝説の研究の為」と記された。そして、当時の民俗学研究の動向を「日本の学問はただ英米の<sup>かす</sup>糟をなめるに忙しく、国に特殊なる問題とその解説を永古の闇に葬り去らんとする」と批判的に捉えられた(※)。

柳田先生がこの2通目の書簡をしたためられた1954年当時、わが国は高度経済成長期前夜であった。それからちょうど70年を経た今日、顧みれば「有為転変は世の習い」を様々な形で経験しつつも、わが国民は常にその時々の最善を尽くして日々を精一杯生き抜いてきた。今日わが国は、比喩的に言えば、先人たちから相続してきた有形無形の積極財産(プラスの財産)群と消極財産(マイナスの財産)群から成っている。そして我々もまた、長い目で見れば、日々新しい積極財産群と消極財産群を生み出し続けているに相違ない。

私はここに雑誌『たね』を創刊し、わが国の文化面における消極財産の解消と新しい積極財産の構築に乗り出したい。戦後約80年の長きにわたり、わが国は物質的な豊かさの維持向上に心血を注ぎ、精神的な豊かさの維持向上にほとんど関心を向ける余裕を持たなかった。今日、かつてメインカルチャーと称された種々の「高尚な」文化(ハイカルチャー)は部分的に消滅の一途を辿り、実質的にはサブカルチャーに落ち込んでしまっている。これとは対照的に、かつてサブカルチャーと称された種々の文化(漫画やアニメ等)はある程度ポップカルチャーたる地位を確立している。文化の変遷は世の常であり、健全な社会の在り方として歓迎すべきものであるが、人々はこのような現代文化の在り方に対してあまりにも無関心ではないか。人々は漫然とポップカルチャーの興隆を受容し、漫然とハイカルチャーの消滅を受容しているようにすら見える。「民間伝説」はその活力をほとんど完全に失い、「国に特殊なる問題」はその所在すら不明瞭になりつつあるが、人々はあくまで無関心を決め込んだままのように見える。現代文化の状況に対するこうした無関心こそが、精神的な豊かさを棚上げにして成長を求めてきたわが国の文化面における消極財産にほかならない。

私は懐古趣味者ではないし、人気取りに走る<sup>きよくがくあせい</sup>曲学阿世の徒でもない。現代を生きる人々が各人の叡智を自由に共有できる場を作ることで、現代日本文化の意識的かつ主体的な構築を図ろうとする者である。そしてその過程で、前述の消極財産の解消を図ろうとする者である。その

背後には、民衆が個々に有する叡智こそが文化形成の原動力になるという個人的な確信がある。アカデミズムにはアカデミズムの使命があり、ジャーナリズムにはジャーナリズムの使命があるが、アカデミズムもジャーナリズムもそれ単体で文化を形成する力までは有していない。文化の形成には常に在野の叡智との協働が必要不可欠だからである。本誌では今後、様々な分野で活躍する人々が様々な文章や作品を発表することになる。そこには正解も不正解もない。本誌はアカデミズムやジャーナリズムの枠を超え、年齢や性別や国籍の枠を超え、あらゆるバックグラウンドの枠を超えて叡智を結集することを目的としているからである。ここに結集される叡智の中には100年後、200年後、300年後の日本文化の前提となるものが含まれているだろう。或いは100年後、200年後、300年後の読者に発掘されて日本文化を再考する契機を与えるものも含まれているだろう。本誌の刊行を通じて、私は新しい時代の日本文化の形成発展に寄与したいと考えている。そして、本誌がわが国の文化面における新しい積極財産とならんことを願ってやまないのである。

本誌に寄稿する人々は皆「種を蒔く人」である。種を蒔く時、全ての種が実を結ばないのは織り込み済みであるが、本誌が「良い土地」である限り、その種は30倍、60倍、100倍にまで実ってゆく。本誌に関わる全ての人々と共に本誌を「良い土地」にしてゆくことを誓って筆を擱く。

本誌をまだ見ぬ未来の後輩たちに捧げる。我々の生きた証として。

2024年9月17日

はぎわら まさひろ  
萩原 正大

※柳田國男の未発表書簡2通見つかる 離島の昔話を収集、民俗学への熱意もにじむ〈ニュースあなた発〉. 東京新聞. 2024-02-18, 東京新聞 TOKYO Web, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/310114>, (最終アクセス: 2024-09-17).

## 目次

巻頭言 日本文化の形成発展と未来—雑誌『たね』刊行に寄せて—……………萩原 正大 2

0……………しまい ゆみこ 5

心にまかれた種というモノ……………近藤 綾子 8

フォッサマグナと、古の日本を辿る旅  
(静岡～糸魚川構造線を車で走破してみました)……………安竹 許由 12

音を浴び、音で繋がり、音で視る……………ポラリス ミコ ひかる 17

師弟関係……………高橋 大希 25

ジュエリー作品介绍……………ゆうこ(Love Infiore) 32

9月の運勢……………miki 34

漢詩『壇の浦を過ぐ』について……………萩原 正大 37

今号の表紙写真……………萩原 正大 46

編集後記……………萩原 正大 46

### 原稿募集

本誌は皆様の原稿を広く募集しております。要領は以下の通りです。

#### ①ジャンル・テーマ

ジャンル・テーマは不問です(但し、成人向けコンテンツはお取り扱いできません)。絵画作品や写真作品の掲載も大歓迎です。自由自在に、ありのままの筆致でお書きください。

#### ②分量

概ね10ページ以内でお願いいたします。

#### ③寄稿方法

以下のメールアドレス宛てに、①原稿と②簡単なプロフィールをお送りください(匿名やペンネーム等でも結構です)。

[magazine.tane.edit@gmail.com](mailto:magazine.tane.edit@gmail.com)

#### ④原稿の掲載

本誌は毎年3月と9月に刊行いたします(次号は2025年3月に刊行予定です)。基本的には直近に刊行予定の号に掲載いたします。2025年3月刊行分につきましては、2025年1月15日に一旦原稿の募集を締め切らせていただきます。

皆様の寄稿をお待ち申し上げております。

「0」

すべてがあり  
すべてが無い

すべての場所  
すべての時とつながりながら

どこからも見えず  
届かない

輪が閉じられる  
完了する

0のなかで  
ひとつぶの「たね」が生まれた

「たね」はあらゆる過去の集大成であり  
保存である

同時に  
限りのない未来の可能性を含み  
ここにある

闇のなかに眠る虹彩(光の顕現)

「0」は呼吸する

聞こえるだろうか

私は目を閉じ  
息を吐く

見えるもの（光）と見えないもの（闇）がとけあう場所

あなたとわたしの界が消え  
はじまりと終わりがむすばれている

その場所（0）で響く 無音の音

なぜ こんなにも  
なつかしいのだろうか

「たね」がそれを  
憶えているのだろうか

わたしたちが  
「れい」であることを  
本当は識っているからだろうか

6

しまいゆみこ  
たね 創刊に寄せて

---

しまい ゆみこ

地球雑貨と癒しの空間ナディア代表

1994 年ナディア設立

2005 年ハワイ島移住

現在はマウイ島ナディア村・横浜ナディアを拠点に活動中

7

## 心にまかれた種というモノ

近藤 綾子

心の原風景、そう聞いて皆さんはどんな風景を思い浮かべられますか？ あなたの心の奥にある懐かしさを伴うような原初の風景ってどんなでしょう？

私は幼い頃、毎年夏になると母の故郷である九州の五島列島へ連れて行ってもらうのを楽しみにしていました。父は仕事があったので大抵は母と弟と一緒に祖父母の家に泊めてもらい、そこから海へも山へもテクテクと歩いて遊びに行くのが夏の日課でした。

遠浅の海で、母の手を頼りに泳ぎを覚え、水遊びに疲れると岩場で見つけた小さな巻き貝をその場で焼いて食べる。潮の香りとはほろ苦い貝の味。

子供の足でも何とか登れる裏山では、スケッチブックに景色を描くと緑と青ばかりの絵になる。濃い草の香り。

島のお盆は盛大な行事で、里帰りの人で島行き航空券は直ぐに売り切れてしまうほど。たくさん提灯が墓地に灯ってお墓が宴の場となり、それぞれの家の墓石の前で集まり、大人たちの談笑する傍らで花火をしました。

幼馴染やいとこ達と五島弁で笑い合う母のくつろいだ笑顔とともに、そんなシーンは私の幼心に原風景として焼き付いていました。豊かな自然と温かく人情溢れる島の人たちと母の笑顔は、私の心に幸福感の種として撒かれたのです。

そんな夏の輝く日々は瞬く間に過ぎ、すっかり日焼けした肌が黄金色になった頃、夏の帰省は終わり父の待つ家へ帰る日が来ます。空港へ向かう車の中で何度も振り返り涙する母と見送る祖母の遠く小さくなっていく姿は、私の心に、痛みを覚える哀しみの種として撒かれました。

島での光に満ちた夏のつかの間の日々。それはいつもいつまでも変わらずそこにあるものではなく、夏の終わりと共に別れの時が来て、当たり前のように日常に戻っていく。非日常から日常へ戻る時、その間をつなぐものは涙。季節は移ろい、風景は変わり、人は歳を重ね、今年会えた人にまた来年も会えるとは限らない。それが世の常だとはわかっている、悲しいものは悲しい。

望郷というメランコリックな物哀しさの中に美しさを見出す美的感覚は「もののあは

れ」として日本では万物に霊性が宿るという考え方とともに昔から、人間同士においてはもちろん、草木や石、虫の声にも感じ入ることのできる心の機微として、大切にされてきました。

江戸幕府が、中国から入ってきた儒教、とりわけ朱子学を統治原理とし、理論ばかりが重視されて行く中、本居宣長は、万葉集や源氏物語など古くからの日本文学において本質となっている情感、しみじみとした優しさや深い感動こそ、大切にされるべきだと論じて「もののあはれ」を以下のように定義しています。

「人は何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきところをしりて感ずるを、ものあはれをるとはいふを、かならず感ずべき事にふれても、心うこかず、感ずることなきを、物のあはれをしらずといひ、心なき人とはいふ也」

現代語風に訳すとこんな感じでしょうか。「人とは何事においても感じてしかるべきものである。心を持って感ずることを物の哀れを知るといい、感ずる事に触れても心動かず感じないのを、物の哀れを知らぬと言ひ、心なき人という。」

心を持って感ずることは大切である。心なき人にならぬようにと宣長は説いています。あの幼い日の私の心は、母の喜びとその対極の哀しみに触れて動きました。島の豊かな自然とそこに宿る精霊、島の人々と、人々と共に在る目には見えぬ御先祖達の霊、そういったモノすべてが、別れという瞬間に哀しむ心と相まって心に迫ってきた。それが、ものあはれを知ったということなのだと思います。

ここでいう「モノ」、ものあはれの「モノ」は、日本人の心に脈々と流れる大和心とでもいう「モノ」だと思うのです。

縄文時代、1万年前頃の日本は太平洋圏の一部としてその北端に位置していたと言われていて、そして当時日本に南方からもたらされたのがマナ信仰だったのではないかという説があります。マナとはハワイ語で目に見えない力、という意味です。このマナ mana が日本に渡ってモノ mono と発音が変わったのではないかという学説があり、マナ信仰はモノ信仰とも言えるわけですね。ここでいう「モノ」は、物質としての物とは違う、目に見えないものの力です。

私が母を通じて得た「モノ」を感じる感性の種は、私の中で私自身が気づかぬまま、根を張りゆっくり時間をかけ、様々な体験や、出会った人達からの影響を吸収して育ち続け、季節ごとに花を咲かせ、実をつけ、様々な形をとって、時には私の子供へ、別の時には近い関係にある友達や仲間へ、あるいは不特定多数の、私のこの文章を読んでく

ださっている方々のもとへも種となって拡散していきます。

私が拡散させた「モノ」の種を受け取った人が、その人の心に根付かせるかどうかは受け取り側の意思によるべきで、私に決定権はありません。種は私の心で育った「モノ」ではありますが、私から飛び立った時点で私個人の「モノ」ではなくなっているのです。植物がその種を抱え込んだりはしないのと同じことです。種は風に飛ばされて何処かへ舞っていき、土の上に落ち、その場所で育つかどうかは種と種の落ちた土次第ですよ。

私たち人間もそうです。

精子と卵子が融合して受精卵となる。受精卵は孵化し、その胚が母の子宮内膜に根を張り着床する。胚は受精卵の卵殻を破って出てこなければならないし、子宮内膜は胚を根付かせるための接着分子を出さなくてはいけない。つまり新たな命の元である胚とそれを育てる母体、この両者が双方とも働きかけないと着床できないのです。

母と父の融合体である新たな命の卵ができる。そしてその卵の殻を破ってまず杯が出てくる。この杯は命の核であり、新たな命である本人ですね。杯＝本人、の卵の殻を破って出ようという意志と、子宮内膜＝母、の杯を根付かせて育てようという意志の合意があって初めて根を張り命が育ち始める。受精卵という種が育つかどうかは、種その「モノ」の決意と、その土壌となる母体の合意が両方必要なんですね。ここにも「モノ」があるわけです。言い換えれば種には「モノ」が宿っているということです。「モノ」と母体の和合があって初めて命の種は芽生えるわけですね。

ここで重要なのは「モノ」の元となった、つまり人でいうと受精卵の元である父と母には「モノ」の所有権や決定権はないわけで、「モノ」はあくまで本人の「モノ」で、本人がそこから独自の「モノ」を自らの意思で育てていくんですね。育つために先ずは母の助けが必要となるわけですが。

種が育つ土壌は豊かで汚染されていない状態が望ましいですよ。母なる自然、と言いますが、正に母は自然そのもの。自然が汚染されているのは種がうまく育たないのと同様、人間のお母さん達、女性達も健やかで豊穡であり続け、種をしっかりと根付かせ安定させる環境が培われてほしい。女性は生まれた瞬間、いえ、それ以前の、胎内で女の子になると決めた時点でその胎児は 700 万個もの卵子を抱え持つそうです。女性の体は想像を絶する命の可能性を秘めているのです。大切に大切にケアされるべき存在ですよ。

そして、種である本人自身も、目には見えない「モノ」、内面にある、言葉では言い尽くせない理屈では説明できない意思と言いますか、魂そのものにもっと大きな信頼を寄せていいんだと思います。

種は小さな一粒ですが、そこから芽吹き、大木に育ち毎年沢山の花を咲かせ実をならせる大きな奇跡を内包しています。それは誰にも奪われたり損なわれたりしないものです。

私たちはもっと自分の持つ奇跡を信頼していいんです。どうすれば信頼できるのか？それはあなたその「モノ」と大なる「モノ」とのつながりを思い出すことです。真我とも言われるモノ、それはいつだってあなたと一緒にいつでもそこにいてくれるモノなのです。

日本に縄文時代からあったマナイズム、それは目に見えない力を感じ取る心。日本人が大切に培ってきたもののあはれという大和心。物質の時代が行き詰まりを見せている今、私たちはもう一度心を取り戻す時代に来ているのではないのでしょうか。

---

#### 近藤 綾子(こんどう あやこ)

海外生活(中国、台湾、アメリカ)を送る中で結婚と子育て、離婚、再婚と死別を体験。単身でハワイ、マウイ島に移住後、オーガニック農園と宿泊施設を運営。マクロビ&ヴィーガン教室主催。

カリフォルニア在住時から精神性と霊性を探究し、禅、ヴィパサナ瞑想、霊気、エナジーワーク、透視、ヨガ、気功のトレーニングを積む。

2023 年末、25 年に及ぶ海外生活を経て帰国。大変容の現代、私たち一人一人が本来の姿で、愛に満ち調和のとれた平和な世の中を生きなくては。そんな思いで講座を開催し、「愛道」を拡め、愛(マナ)びを伝えている。

「Embracing the Art of Love」(邦題:愛道)著者。2024 年末、日本語版「愛道 愛とは愛(マナ)ぶもの」(仮題)出版予定。日本看取り士会認定看取り学講師。愛知県一宮市在住。

[www.embracingtheartoflove.com](http://www.embracingtheartoflove.com)

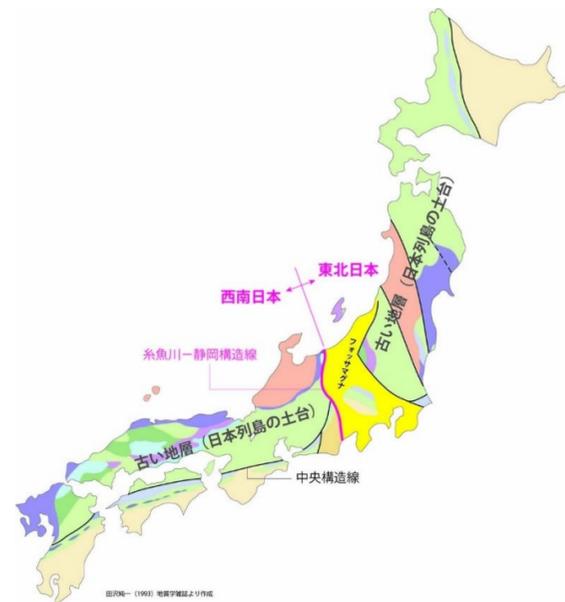
## フォッサマグナと、古の日本を辿る旅 (静岡～糸魚川構造線を車で走破してみました)

安竹 許由

転校ばかりの子供の頃、干上がった川を歩くのが好きだった。川べりを歩くのだ。宝物を探して。貝殻の化石はよく見つけたし、小さな水晶を見つけた時はもう有頂天。綺麗な石や、土器のかげらに縄目がついているかどうか、もうドキドキしたさ。下ばかり見て内向的で友達も少なかったので、雨の日には、なぜ山の中で「貝の化石」が見つけれられるのかなど、百科事典を引くのが好きだった。

辞典には、「太古の昔に海だったところが地球のプレート活動で隆起し、高い山になった。その山が少しずつ削れて川に流れ、化石が見つかる」とある。それを知った時は、地球って今も動いているのだな～と感激したのを覚えている。

そのプレート活動が今もあるなら、境目を見たい。地層の大きな溝「フォッサマグナ」を知った時、いつか必ず行ってやる。待ってろ糸魚川！と、子供の私は誓ったのだった。あれから数十年。静岡・浅間神社横の石階段（百段もある断層）を登りながら思い出した。フォッサマグナを見に行かなくては。



画像1：フォッサマグナと日本列島の地層。フォッサマグナミュージアムより。

豊橋から太平洋を見ながら静岡へ、富士山の横を構造線沿いに北上し、左に南アルプス、右に八ヶ岳を見ながら、諏訪湖を抜け、安曇野、白馬、糸魚川。約400kmの一筆書き。フォッサマグナに沿って車を走らせる。そう、高速道が構造線沿いにできているのだ。

道の駅に立ち寄りつつ、郷土のそば、発酵食品などを見る、買う、食べる。

「おやき」は実に多様性がある。包む皮の生地が小麦、そば、ご飯とあり、野菜などの具を包んで蒸すだけでなく、灰の中に入れて焼くもの、焼いてから蒸すもの、笹で巻いたもの、蒸してから揚げたもの（鬼無里村）。様々な「おやき」にワクワク。おやきの歴史は古く、縄文時代の遺跡（小川村）からおやきの原型が出てきたそう。

地域の見たこともない山菜たち、雑穀などにもであう。土が変わると、そこにできる食材も、食文化も変わる。そう言えば伊豆に住んでいた時は、この時期よく明日葉を食べたものだ。三河では見かけたことがないな。

新潟県、糸魚川市のフォッサマグナミュージアム到着。

宇宙や太陽系そして、地球の成り立ちから、人類の遠いルーツをわかりやすく展示した地層と石の博物館。古い地層と新しい地層の両方を見比べ、化石、様々な鉱物（レムリアンシードも）、ヒスイ、太古のサンゴなどなど、たくさんの展示物に石の鑑定までしてくれる。ユネスコ世界ジオパークだけあって、ここは天国じゃん。

特に地球の成り立ちは、動画で超わかりやすく展示されていて感激。

映像で赤いマグマが足元に流れてくると、熱ささえ感じる！

地球は鉄の星と言われ、鉄が多い星だ。（地球の1/3は鉄）地球内部の溶けた鉄とニッケルの対流で強大な磁場ができ、宇宙からの放射線をさえぎってくれている。この強大な磁場のおかげで、地球上どこでもコンパスをかざせば方向を示してくれるし、極ではオーロラも見ることができる。また、この星の生命の多くは赤い血液を持つが、その赤は鉄が含まれる。もし鉄がなかったら、磁場が生まれず、地球から水は蒸発してしまっていたら、海も存在しなかったであろう。隕石の衝突で出来た熱々の地球は、鉄による地磁気のおかげで水の惑星となり、海が出来て地表が冷やされた。そのため冷えたプレートと、内部から湧き出すマグマとの対流ができてプレートが動いている。（地球以外の星では、水がないのでプレート活動は見当たらないそう）つまり、火と水のおかげでプレート活動が生まれ、深海からエベレストまで、この地球の多様性溢れる自然を作っている。日本も例外ではなく、プレート活動でできた島国だ。

長い年月を経てプレートが移動する。日本はもともとユーラシア大陸の一部だったが大陸から分離。その後、西南と東北の二つに分断され、その間は海だったとか。北アメリカプレートとユーラシアプレートの境界がそう、ここ糸魚川～静岡なのだ。プレートの移動は地震を伴う。江戸三百年の歴史を作った徳川家康も生誕の地ではなく、静岡で院政し、もう一つの境目である柏崎～千葉構造線上に日光東照宮（墓）を作り、地層の境目にクサビを打つ要石としたのだろうか？

そんな妄想をしつつミュージアムを見て回り、糸魚川でヒスイが取れるのも、プレートが作った断層のおかげと知った。ヒスイにはなぜか惹かれる。  
ヒスイで作られた勾玉は三種の神器の一つであり、固く加工しにくいことから、変化しないものとして、中国ではヒスイで作られた印鑑（玉印）で国を治めていた。そのヒスイが日本では世界で最も早く、縄文時代から加工し使われていたとのこと。（日本の国石はヒスイ）この旅はおやき、ヒスイ、縄文の匂いがプンプンするなあ。



画像2：プレートの移動と日本列島の地質学的推移。フォッサマグナミュージアムより。

フォッサマグナミュージアムを堪能して、敷地内の公園を散策。ひっそりと佇む小さな建物「長者原考古館」なるものもあったので、こちらにも。火炎土器に、男性性と女性性を示す石棒と土偶、加工途中のヒスイなど縄文文化が常設され、盛りだくさんの展示物！この遺跡は、石斧

やヒスイ玉の生産、交易の拠点としてかなり大きな規模の遺跡で、東京ドーム3個分の面積があるそう。（これまで発掘調査されたのは全体の3%）。硬いヒスイは、鉄が生産されるまでの間、様々な道具の材料として使われていた。

その土地を治めていた「奴奈川姫（ぬなかわひめ）」はヒスイの生産加工を管理していた。この姫は『古事記』や『出雲風土記』などの古代文献に登場する高志国（現在の福井県から新潟県）の姫であると言われ、古事記には出雲国の大国主命（おおくにぬしのみこと）が沼河比売（＝ぬなかわひめ）に求婚に来た、とあり、また、『出雲風土記』では天の下造らしし大神（大国主命）が奴奈宜波比売（＝ぬなかわひめ）の命と結婚して御穂須々美（みほすすみ）命を生み、この神が美保に鎮座しているとの事。  
そして、大国主大神と奴奈川姫との間に生まれた子が建御名方神（たけみなかたのかみ）で、姫川をさかのぼって諏訪に入り、諏訪大社の祭神になったといわれている。

ヒスイが縄文時代の宝石であり、様々な道具の材料であったのであれば、縄文文化と切り離せないものであったであろう。

穿った見方をすれば、縄文文化のあった糸魚川に、米作文化がもたらされた時、縄文と弥生、その文化の交差点にフォッサマグナはあり、両文化はどちらかにかに淘汰されるのではなく、自然に混ざっていったのではないだろうか。そしてその象徴として、縄文＝ヒスイの勾玉が三種の神器に入っているのではなかろうか。ともすると、神話にある出雲・糸魚川・諏訪の三社が日本人のルーツと深く関わっているとも考えられる。

そんな妄想をしながら、博物館を後にし、そこで知った奴奈川姫に焦点を当ててみる。博物館からほど近く、まっすぐに真北に位置する場所に、奴奈川姫を祀る「天津神社・奴奈川神社」があるとの事。行ってみよう。

博物館は丘になっていて、そこを下ると海が見えて来た。日本海だ。  
車で5分、糸魚川市役所の隣に天津神社・奴奈川神社がある。大きな茅葺き屋根の静かな神社。12代景行天皇の御代の創立とされる。静かで清らかな空気の流れる素敵な社。舞楽堂もあり4月には神輿同士のけんか祭りも開催されるそう。糸魚川の市役所という重要な場所に、この神社。奴奈川姫って何者？

子供の頃大地が動いていると知り、その大地の移動を見ることができるとの事でフォッサマグナに興味を持ったが、その答え合わせは、太平洋から日本海まで、様々な食文化の差異、地球の成り立ち、ヒスイ、縄文遺跡と神社、神話など、私にとって大きな収穫を得る旅となった。

ちなみにフォッサマグナを見つけたのはドイツ人の地質学者、ナウマン博士だとか。そう、あ

のナウマンゾウの名付け親でもある。縄文時代は、どんぐり拾って、貝を掘り、マンモス追いかけていて、文字もなく歴史では食うや食わずの野蛮文化とされている。しかしながら、本当は人の本質に忠実で、豊かで楽しく、アートに溢れ、他者に対する慈しみと愛で溢れた共同文化を営んでいたのではなかろうか。

現代社会は文明で溢れ、人の本質であるはずの、高度な思考や、絵を書くこと、音楽を作るなどを、AI がとって代わろうとしている。あの岡本太郎が縄文の火炎土器を見て言った「芸術は爆発だ」は、「自分自身の内なる情熱が弾けて芸術の衝動が生まれる」というもの。創造性こそが、今後最も必要な社会になるのであれば、私の中にある、赤いマグマを見つめ、縄文をもう一度振り返りたいものだ。

---

#### 安竹 許由(やすたけ もとよし)

玄気、ナチュラルケア鍼灸院、ベジカフェロータス代表。

2歳よりマクロビオティック(玄米菜食)で育つ。そんな家庭環境から食品に興味を持ち、農学部へ。卒業後は自然食品を扱う、株式会社玄気に入社。食から体へと探究心が進み、鍼灸師に。米国の分子栄養学を学び、博士課程を修める。地球環境の保護と平和に静かな情熱を燃やす。

## 音を浴び、音で繋がり、音で視る

ポラリス ミコ ひかる

---

音は、目にみえないもの  
耳では聴こえない領域でも  
そこに確実に存在する周波数だと  
感じています。

音を浴びる  
音で繋がる  
音で視る

そのことを体験出来た  
わたしの経験を  
シェアさせていただきますね♪

#### ☆コシチャイムとの出逢い

コロナ禍で、  
自由に人と会えなくなる  
そんな時に出逢った  
フランス製の癒しの楽器  
【コシチャイム】  
地・水・風・火  
四大元素のエネルギーに調律された  
竹で包まれ、  
ひとつのチャイムに8つの音

響きあう音色

倍音が奏でる周波数は  
こころもからだも魂も  
一瞬で癒してくれる

そんな  
コシチャイムに出逢えたわたし

すぐに  
マキノ式チャイム音響師の講座を受講、認定を受け、サウンドヒーリングが出来るようになりました。

そこから、音響師として  
身近な大切な人たちへのヒーリングをはじめ、  
1年後には、  
コシチャイムに  
5種類のザフィアチャイムが加わった  
マキノ式アドバンス・チャイム音響師の認定も受けました。

ここから、サウンドヒーラーとして  
現在も、活動をさせて頂いております。

#### ☆目にみえない感覚

チャイムを奏でていると  
耳だけで聞いているのではないことが  
すぐにわかります。

人間のからだは  
70%以上が水分といわれています。  
目にみえない高波動の周波数が  
細胞の中まで振動させて  
ヒーリングをしていきます。

キラキラとした  
光のような音が  
音のシャワー  
光のシャワーのように  
無限に降り注いでくる

宇宙の中に浮いている感覚

あごの周り、背中、手のひら、足の裏  
お腹もキュルキュル動いてくるし

からだ全体が  
緩んでよろこぶ感覚

いつのまにか  
ウトウトと寝てしまって  
自分の寝息でハッと意識が戻ってくる

目にみえない感覚を楽しめるのです。

基本的には、  
片手にひとつずつチャイムを持ち  
少し揺らして奏でるのですが

なぜかわたしのチャイムは  
ちょっと不思議な動きをします。

友人が名付けた  
【ひかるのペンデュラム奏法】

ダウジングで使うペンデュラムのように  
わたしがチャイムを持って  
揺らすことなく  
上下に動かしていると  
チャイムが勝手にクルクル周り  
音を奏でるようになりました。

#### ☆音が連れてきてくれたメッセージ

チャイムのヒーリングをしていくと  
ハイヤーセルフからの  
メッセージを受け取れていることに  
気付きました。

後で知りましたが

宇宙と繋がるときに  
【音】は、最も最短で繋がれる手段なのだそうです。

そこから  
高次元の世界へのアクセスを体験しました。  
リーディングとか  
チャネリングとか  
いろんな言葉がありますが  
正直  
わたしはどっちをしているのかは  
よく分かりません。

どっちでもいいし  
どっちでなくても  
全然違って佳き

そう感じています

以前からの感性で  
アクセスさせて頂いた世界を  
アニメのようなヴィジョンでみせて頂けるので  
イラストにしてフィードバックすることもあります。

#### ☆宇宙と繋がる

ある時から  
宇宙語も話せるようになりました。

普段、日本語を話すときに使う  
口の中とは違う部分を使うのです

例えば、  
プレアデスに繋がると、  
シュププルシシキリリ…と  
フランス語のような感じ（笑）  
シリウスは、シリシリリリ…そのまんまやん（笑）  
アンドロメダは、テレシケレ…  
といった感じ

#### ☆周波数を感じる

そうこうしているうちに、  
自分がみている周波数が  
わかるようになってきました。

受け手の方と  
演奏しているわたしの周波数が共鳴して  
音色が変わることもわかりました

しかも、同じ人でも  
その方の状態によって  
鳴り方も変わるので

クライアントさまから  
『ひかるさんが奏でる音は  
本当に優しい音色…  
美しく癒される…』と  
よろこびのお声を頂戴しますが

わたしが奏でるから、  
だけではなく、  
その方の周波数と共鳴しているので  
この素敵な音色は  
あなたの周波数なのですよ〜と  
お伝えしています♪

#### ☆願望実現

意識とボディの周波数を変えると  
現実が変わる

自分が変わると  
周りが変わる

パラレルワールドを体験していくと

願望実現が  
いかにスピーディーに出来るか  
一瞬一瞬で行ったり来たり出来ることに気がきます。

わたしの統合  
どんな世界も  
わたしが作った自作自演の世界

全て 体験しに来ている

そのことに気付いて  
腑に落ちたのは

チャイムの音を浴びながら  
高次の世界にアクセスして  
様々な方からのメッセージを  
お伝えしてきたからこそ  
かもしれません

自分の中の光と闇  
2つあって完成する

わたしの統合も体験しました

#### ☆世界平和

世界中の人たちが  
本来の自分でいられたら  
得意なことで生きていけたら  
魂で決めて来たことを  
体験出来たら

世界平和

わたしが今させて頂いていることは

多くの方々が

本来の自分で生きていけるように  
その道と一緒に見つけていけるように…  
怖いけど  
一步を踏み出せるように  
背中を押させていただくこと

どんな自分も赦し  
自分自神が そのまま在るだけで  
完璧で最幸な存在であることに気付く  
お手伝いをさせていただくこと

それが  
わたしの魂が決めて来た  
使命のうちのひとつだと感じています

音との出逢いで  
自分の感性が開花して  
自分のミッションが見つけれられました

#### ☆未来のみんなへ

こんなことをしているひとも  
いたのですよ～笑

わたしのモットーは  
【人生は、実験！  
おもしろがって  
たのしんで  
自分の周波数を上げて  
望む方向へ向かっていく  
愛とよろこびに溢れる世界にいること】です。

未来のみんなの目の前には  
いま、  
どんな世界が広がっていますか？

以上です。

---

### ポラリス ミコ ひかる

音と癒しのセラピスト ひかる(サロン【ポラリス ミコ】代表)

- サウンドヒーラー(マキノ式・チャイムブラティックショナー)
- タロットカード メッセージャー ●エネルギーワーカー ●太陽/月：ふたご座
- 13の月の暦：kin 69 赤い自己存在の月 ●バースタロット：9：THE HERMIT(隠者)

幼少期より、感受性が強く、集団生活での生きづらさ、家庭環境の不和により周りの空気を読むことが癖になっていました。

過去のお仕事は、接客業、デスクワーク、人財育成、CSスペシャリストなど、人と関わる事が多く、全ての経験が現在のお仕事にも活かされています。過労で長い療養期間も体験しました。

その後、さまざまなご縁で出会いがあり、自分の進む道を見つけてからはワクワク楽しみながら「人生を実験」する日々を過ごしています。

私の経験やセッションを通して、少しでもお役に立てることがありましたら幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

#### 【活動内容】

- ・フランス製の楽器チャイムを使ったサウンドヒーリング、チャネリング
- ・タロットカード リーディング、タロットカード リーディング講座講師
- ・仙骨開きエネルギーセッション、クリスタルヒーリング
- ・マルシェ出店など

一人一宇宙の根元(こんげん)、高次の存在や潜在意識にアクセスして

魂や肉体レベルの浄化とヒーリング、DNA や過去の記憶から引き継がれてきた潜在的な傷を癒し、望む方向へエネルギーを切り替え、願望実現や本来のあなたを生きるお手伝いをいたします。

宇宙語(ライトランゲージ。リーディングの際に視えるアニメのような映像)を独特なイラストに描いてお渡しするメニューやオンラインでのセッション、遠隔ヒーリングも行なっております。

## 師弟関係

高橋 大希

### 師匠

この本の代表者である萩原さんとのご縁で、文章を書かせていただくことになりました。内容は自由、文字数も自由ということで、書き始めてみたものの、これがとても難しく、自身の文章能力を客観的に見つめなおす機会となりました。私は普段、鍼灸師として患者さんの治療にあたりながら、鍼灸学校での教員をしております。学校の仕事もあってか文字を書く機会に恵まれてきました。書類作成、雑誌への連載や投稿、ブログの作成などです。しかし、これまで書きたくても(残したくても)書けない(残せない)文章というものがいくつかありました。文章を読む(知る)可能性がある方々への「配慮的なもの」があったからです。しかし、今回このような機会をいただき、文字に残すチャンスだと思いました。

私には鍼灸師としての「師匠」と呼んでいる方々がおります。師匠との関係は「師弟関係」と呼ばれ、経験によって培った知識・技能などを伝授する関係です。伝授する側は「師匠」と呼ばれ、伝授される側は「弟子」と呼ばれます。将棋や落語の世界などで耳にすることがあるかと思いますが、私の職業である「はり師」「きゅう師」の世界でも未だに耳にします。今回文字に残したいのは、そんな師匠との出会いや師弟関係についてです。まずは少しだけ、予備知識として「鍼灸」について触れてから本題に入りたいと思いますが、どうぞお付き合いください。

### 鍼灸師とは

鍼灸師とは、ツボと呼ばれる病の回復を促すポイントに、鍼や灸を用いて刺激を与えて治療をする職業です。鍼で刺激を与えるのが「はり師」、灸で刺激を与えるのが「きゅう師」です。道具の選択以外、資格取得に必要な勉強はほとんど同じな為、学校では同時に勉強することが基本となっております。資格も同時に取ることが通常なので「鍼灸師(はりきゅうし・しんきゅうし)」とまとめて表現されます。

資格取得には、専門学校や大学で3年間学び、国家試験に合格する必要があります。現代医学(西洋医学)が中心の日本の中で、伝統医学(東洋医学)を学ぶこと、「開業権」を与えられることが特徴といえます(ちなみに、開業権のある医療職種には、医師、歯科医師、薬剤師、助産師、臨床心理士、柔道整復師、あん摩マッサージ指圧師などがあります)。「伝統医学(東洋医学)」は、古来、中国から伝わり日本で独自の発展を遂げてきました。しかし近年では現代医学(西洋医学)によるメカニズムも説明(解明)ができるようになってきました。それもあってか、スポーツ現場や美容分野にも仕事の場が広がっていますし、病院でも行われています。そんな鍼灸師を目指して、私は岩手県の田舎を出て、静岡県熱海市の鍼灸学校に入学しました。そこで師匠に出会います。

クラスには、性別はもちろん年齢もバラバラの人達が、静岡を中心に全国から40名が集まっていました。家族や親類に鍼灸師がいる人、医療系の仕事に興味がある人、自身の病気やケガを鍼灸で治った経験がある人など、この職業を目指したきっかけは様々です。かくいう私はそんなきっかけ

もなく、思い付きと勝手な憧れだけでこの道を目指しました。学校での3年間、鍼灸の実技指導をして下さったH先生が私の「最初の師匠」です。師匠って一人じゃないのか、と思う方もいるかもしれませんが、順に説明していきます。師匠の年齢は十二支で2周以上の男性です。初めて鍼を人に刺したのは師匠の授業でした。相手は私より年上の男性で、場所は肘にある「曲池」(きょくち)というツボでした。鍼=痛いイメージが一般的だと思いますが、私の初めての鍼が痛がられることはなかったです。しかし、全く刺さりません。無理に力を込めると鍼が曲がってしまいます。鍼の素材は銀、太さは髪の毛程度の0.2mmです。師匠は苦戦する私を見かねてか近づいてきて、私に鍼から手を離すように言い、代わりに鍼を持ったと思ったら深々と刺さっていました。その瞬間に、この人こそ「師匠」だ、と思いました。今から25年以上前のことですが、当時の様子は昨日のこのように私の頭の中に映像とし残っています。私にとっては初めての鍼だが、師匠はプロ。当然とはいえ、技術の差があることを見せつけられた、という気持ちでいっぱいでした。

師匠の授業は、主に鍼と灸の実技を基礎から応用までの実習です。鍼灸学校の教科書に『東洋医学概論』というものがあります。西洋医学とは違う東洋医学独自の人体の仕組みや、その理論背景を学ぶ科目です。鍼灸学校は東洋医学を学ぶ場所、と思うかもしれませんが、実際3年間の授業の7割が西洋医学です。現代の日本において、医療に関わる者はまず西洋医学をしっかり学び、それから東洋医学を学ぶというのが国の方針です。師匠は実習中に、東洋医学の講義もしてくださいました。その内容は、『東洋医学概論』にはさっとしか書かれていない「東洋医学の根本」とも言える内容で、それが「易」と言われる、思想、哲学、占いの考え方だったのです。後に「師匠の師匠」から「易」を教わることになるとは当時は夢にも思いませんでした。

さて、3年生の時、師匠にも師匠(以下、K先生)がいること、今度横浜で開催される学会に参加されることを知り、K先生見たさに、クラスメイトと一緒に学会に参加しました。K先生は髪の毛が後ろと横にしかない年配の、いかにもベテラン鍼灸師といった佇まいで、師匠の講演を聞いていました。師匠の講演後にK先生への挨拶の場を設けていただき、一緒に写真を撮ることができました。学会参加からしばらく経った年末に、東京の大塚でK先生が講演されるとの情報を得た私は、K先生に会いたくて講演に申し込みました。再びK先生にお会いでき、横浜の学会で写真を撮っていただいたお礼を言ったのですが、K先生は覚えていらっしゃいませんでした。その時、「K先生に自分を覚えてもらいたい」という気持ちが芽生えたのでした。傍から見ればただの「追っかけ」、今なら「推し」と言えるでしょう。

### 師匠の師匠

それから晴れて鍼灸師になった私は進学(鍼灸学校の先生になる為の過程)の為に東京に移り住み、「推し」であるK先生の勉強会に参加し始めます。K先生は積聚(しゃくじゅ)治療というオリジナルの鍼灸治療を創った方で、私は学生時代にその治療法を師匠から授業で教わっていました。勉強会は新宿で月に1回3時間、私と同じくらいの年齢や経験年数の鍼灸師が20名ほど集まっていました。「師匠の師匠」の講義なので当然といえば当然ですが、見るもの聞くもの全てが初めてで毎回興奮していたのを覚えています。K先生の講義を聞きデモを見て、受講生同士で実習します。そんな中、K先生と会話する機会は1回あるかないかでした、それでも会話ができるととても嬉し

い。K先生は手取り足取り教えることはせず、間違っていると注意されますが、出来ていても褒めることなく、実習中は常に緊張感が漂います。K先生の髪型については先に少しだけ触れましたが、先生のお顔は学生時代に無理がたたって神経が麻痺した後遺症がありました。あの髪型とそんな顔立ちもあってか勉強会で拝見するK先生のお姿はとても厳しい印象でした。勉強会最終回には懇親会が開催されましたが、人見知りで当時お酒があまり飲めなかった私はK先生と会話することなく時間を過ごしました。会計役を任せられ、人数で会計金額を割って計算していたところ、K先生のお嬢様(鍼灸師)から「父は人数に入れないで、勉強会でお世話になったのだから」と言われ、この業界はそういうものなんだ、と初めてK先生にモヤモヤした距離感を感じました。小さい頃から地元祭りに参加していた私は、目上の者が下の者の面倒を見ろ、おごってやれ、と言われて続け、先輩からご馳走してくださった際にお礼を言うと、「お前には後輩ができたときには同じようにご馳走してやれよ」と言われてきたからです。結局2年間、毎月のように勉強会に参加しましたが、K先生との距離が縮まることはありませんでした。それから数年後、師匠からお声が掛かり、K先生が会長をつとめる積聚会の講師を担当することになりました。仕事を任された嬉しさもありましたが、積聚会に関わることでK先生に会えるのでは、という期待のほうが大きかったです。また、ちょうど同じ頃に学会の仕事を師匠とK先生とすることにもなり(K先生は学会の副会長を務められていました)、仕事の帰りに3人で何度かお酒を飲んだのは良い思い出です。K先生は食に対する興味が強く、いろいろなものを召し上がっていました。ある時、3人で入った新宿の居酒屋でK先生がイナゴの佃煮を注文しました。田舎育ちの私に抵抗はありませんでしたが、師匠はこの手のものとても苦手なや取りを傍で見ていて、私も少しだけ二人との距離が近づいた気がしました。

それからしばらく経ったある日、K先生にアメリカの鍼灸関係者から依頼があり、アメリカのボストンで「積聚治療」のセミナーを開催することになりました。師匠からそれに同行することを知り、すぐさま私も一緒に行きたいと師匠にお願いしました。師匠はK先生にお話しして下さったのですが、初めての事なので次の機会を待つようにと伝言されました。とてもがっかりしましたが、それもつかの間のことでした。K先生がアメリカに行っている間、K先生は自分の治療院をお休みすることになります。そこで誰か代わりに治療院をやってくれないか、ということで代診者が募集され、ここぞとばかりに立候補して代診を務めることになりました。K先生は私の「腕」(技量)を考慮して、一日に診る患者さんの数を少なくして予約を取って下さいました。それでも当時の私にとって一日に10人以上の患者さんを診ることは初めてのこと(K先生は当時、一日に30人以上の患者さんを診られていました)。しかも、予約の患者さんは普段K先生の治療を受けている方々、つまり「患者歴」が私の「鍼灸師歴」より長い人、いわゆる「ベテランの患者さん」ばかりでした。K先生が自分の患者さんを任せてくれた、という期待に答える暇もなく一日が終わり、K先生との技量がまさに雲泥の差であることを身をもって知った代診でした。

その翌年、K先生と師匠に同行させていただき、念願だったアメリカの地を踏むことになるのでした。

### 師匠の師匠を追っかけて

海外に行くのは鍼灸学校の学生時代に、中国の北京と遼寧に研修に行った以来です。行きの飛行機の座席がなんとK先生の隣で、機内でいろいろな話をしました。中でも覚えているのが「結婚」についてです。高橋君はいい人はいるのか、から始まり、結婚についてどう思っているのか、子供ができるかどうか、そして、それが鍼灸師という職業にどう影響するのかなどなど、基本的 K 先生の質問に答える形で会話となりましたが、K 先生の鍼灸に対する考え方をいろいろ聞かせていただく貴重な機会となりました。突然のことに戸惑いながらも、K 先生と初めて長く話し、しかもその内容が鍼灸に関する具体的なことではなく、プライベートなことだったというのが新鮮でした。後に会話の内容を振り返ると、師匠が学生時代に指導してくださったことの多くは、K 先生から教わったものであることを知った瞬間でした。

さて、アメリカでのセミナーは現地の鍼灸学校を会場に行われ、宿泊は主宰者の計らいもあり一軒家を借りることになりました。いわゆる B&B です。日本でいう軽井沢のような避暑地的な場所にあり、静かで高い木々に囲まれた場所でした。セミナーは午前 9 時から始まり、お昼休憩をはさんで 16 時には終了。K 先生が講義をして我々は実習の手伝いをします。帰ってきたら、庭で冷たいビールで乾杯してその日のセミナーを K 先生と振り返ります。私にとってはかけがえのない時間で、忘れられない思い出です。師匠と出会わなければ積聚治療と出会うことも、K 先生と出会うことも、アメリカに来ることも、そして K 先生とビールを飲みながら語らうことも無かったです。

アメリカには毎年行くことになりましたが、ある年のセミナー後、皆でハーバード（ケンブリッジ）に買い物に行った際に、一杯飲もうとお店に入りました。当時の私は日本で「コロナビール」（メキシコ発祥のビール五）にはまっており、そのお店のメニューにもあったので注文しました。すると K 先生から「そんなものは日本でも飲めるでしょ、ここでしか飲めないもの（地ビールや地元ワイン）を飲みなさい」とお叱りに近いアドバイスをいただきました。なるほど、と思いつつ、そういえば K 先生はいつも珍しい物を注文されていたことを思いだし、何も考えていない自分を反省しました。こうして少しずつ、K 先生と会話が増えていき距離が縮んでいったような気がします。

その後、K 先生の治療院が改築され広くなり、研修生を受け入れることとなり、またまた私は立候補して、週に 1 日（後に 2 日）K 先生と過ごす時間ができたのでした。

#### 師匠の師匠が新たに師匠に

この頃からでしょうか。K 先生を師匠として意識し始めたのは。研修といっても K 先生が何かを指導してくれるわけではありません。K 先生は自分の患者さんを治療し、私は自分の患者さんを治療します。もっとも私にはほとんど患者さんがおりませんでしたので、K 先生が治療している様子をカーテンの隙間から覗いて見学したり、K 先生の初診患者さんの問診を担当させていただいたりしていました。毎回のお昼休みの 2 時間は、食事をしながらいろんな話をしました。アメリカでの「コロナビールの一件」もあってか、以前に比べて K 先生とは会話がし易くなっていました。話のネタですが、私は普段鍼灸学校の教員をしていましたので、教育関係の現状、学会のことなどを報告するようになっていました。K 先生は日本の鍼灸界は勿論のこと世界に目を向けていましたので、教育現場の事や学会の動向など興味津々で聞いてくださいました。いつしか、K 先生が喜びそうな鍼灸関係の話題を報告するようになっていき、K 先生を楽しませることが私の「仕事」になってい

ました。先生との会話の機会が増えると、それを目にした周りの鍼灸師達にとって、私はいつしか「K 先生から鍼灸の事を何でも教わっている羨ましい人」と思われていました。実際のところ、皆が羨ましがらうようなことを教わったためしはなく、ただただ K 先生を楽しませたいと思って、K 先生が喜ぶ話題を提供していただけなのですが。

そうは言いつつも、K 先生と会話ができることを利用（特権）として実行したことが 1 つあります。それは、K 先生に写真を撮らせて欲しいとお願いしたことです。K 先生の技術を写真と文章で勉強会の機関紙に掲載すること（残すこと）が目的です。今のようにスマホでの写真や動画がまだまだ普及しているとは言い難い時でしたので、一眼レフカメラで K 先生を撮り、解説を加えて、連載を始めました。幸運にも記事を書くたびに K 先生は文章の校正をしてくださりました。今こうして様々な機会に文章を書くことができるのも K 先生の添削のお陰です。連載開始時は、修正で真っ赤だった原稿も、連載を重ねるうちに赤色がほとんどなくなり、いつしか赤入れすることなく口頭で一言二言コメントされる程度になっていました。そんなこともあってか、その後、K 先生に来た執筆原稿を代わりに担当することになりました。その中で、厚生労働科学研究費補助金を受けたものがありました。書籍化されて全国の主要な図書館に配布され、その後デジタルデータ化され、現在誰でもダウンロードして閲覧可能となっております。2010 年より少し前のことです。

いつしか K 先生の信頼を得たのか、K 先生が新しく本を執筆する際には必要な情報を調べて提供するようになっていました。ある本を上梓された際、巻末の挨拶に私の名前を入っていることに気づきました。K 先生にお尋ねすると「お礼だよ」と言って下さり、いつの間にか K 先生の役に立つようになってい、と思えた時はとても嬉しかったです。その後も K 先生はご自身に来た原稿依頼を私に相談して下さり、代わりに執筆する機会も与えてくださりました。K 先生の代わりに執筆を始めた一つに、カナダで発行されている鍼灸雑誌があります。日本語と英語で掲載されていますが、お陰で連載は 10 年を越えました。最初は心配だったのでゲラのチェックをお願いしましたが、いつしかそれもなくなり、K 先生も私の原稿の初見を雑誌で読むようになり、その都度感想を述べてくださいました。

そうそう、こんな事もありました。ある時、K 先生に鍼灸関係の雑誌から原稿の依頼がきました。K 先生はお忙しかったこともあり、師匠に代わりに書くように依頼したのですが、師匠もその時忙しかったようで、別の者が書くことになりました。もちろん、内容は師匠が責任をもって確認することを前提に。それからしばらくして雑誌が発行され、K 先生のところにも届き、私も雑誌を購入しました。研修日の早朝、K 先生に会うなり、雑誌を読んだか、感想はどうかと珍しく矢継ぎ早に質問され、正直あまり良い原稿でない旨の感想を伝えたところ、「あなたもそう思うか」と感想が一致し、「なぜこのような内容（原稿）になってしまったのかね」と困った様子でいらっしゃいました。その後は、原稿に関する何を頼って下さるようになり、K 先生が最後に書かれた書籍では、ゲラの完成時に感想が欲しいからとコピーを下さり、拝読し恐れながら意見もさせていただきました。その本の思いで話を一つ紹介しましょう。唐突ですが、「硬い物」について例を上げて説明する部分がありました。K 先生は「硬い物」の例をなんと「甲冑」と表現していました。「かっちゅう」です。「石」とか「ダイヤ」とかではなく「甲冑」。今時の読者に「甲冑」は分かりにくいのではと意見したところ、気分を害してしまったようでした。後に、この「甲冑」が K 先生の頭の中を少しだ

け覗いて見たような経験となっていくます。

### 師匠 K 先生

アメリカでのセミナーは、10 年以上開催されましたが、K 先生が最後に行かれた時の年齢が恐らく 70 歳だったと思います。それからは代わりに師匠を中心にアメリカに行くようになり、私もサンフランシスコで 2 回セミナーを開催することができ、フランス人鍼灸師の為の web セミナーも開催することができました。セミナーの開催をいつも誰よりも喜んでくれたのが、K 先生でした。

週に 2 日の研修、海外のセミナー同行などなど、結果 K 先生のそばで 17 年間一緒に時間を過ごさせていただきました。

2022 年 8 月 3 日、突然我々の前から去ってしまった K 先生。多くの患者さんから、K 先生の後を継いで治療院を続けて欲しいと懇願されましたが、K 先生の遺言もあって治療院は閉めることになりました。K 先生にはお子さんが 4 人いらっしゃいますが、一番下のご子息が私と同年、そして実は私の父と K 先生は同年です。年齢だけなら親子のような関係でもあり、師弟関係でもあり、鍼灸治療を臨床、理論、思想の方面から追及し続けてきた先輩であり同士であったような気がします。

2023 年 2 月 4 日、K 先生の治療院からそう遠くない場所で、私は新たに鍼灸院を開業することとなりました。K 先生の奥様のご厚意もあり K 先生の書籍や、治療院に飾ってあった置物や絵を譲り受け、新しい治療院に飾ってあります。

K 先生がこの世を去って、何回墓参りにいったでしょうか。未だに K 先生がいないという現実がピンとこず、日々仕事に追われています。新たに開業した治療院では、K 先生が長年診ていらした患者さんを引き継いで診させていただいております。患者さんから、過去の病気のこと、以前 K 先生がこんな症状を治してくれたよ、と話を伺うようになり、K 先生がいないことを改めて実感するようになりました。でも、K 先生がいないことを一番実感するのは、患者さんの症状がなかなか改善しないときです。そんなとき、「K 先生だったら恐らくこう治療するだろう」と考えるようになっている自分があります。漫画や映画のセリフのようになってしまっていますが、「K 先生は私の中にいる」と実感するようになっているのです。

さて、長々と書き綴ってきましたが、師弟関係とはどんな関係でしょうか。師匠が弟子に何かを教える、私の場合では鍼を教わることになるのでしょうか。少し前のニュースで、落語家の立川志らくさんが、弟子を破門すると話題になりました。志らくさんの主宰する劇団の稽古に一門の弟子たちが 1 度も見学に来なかったことを嘆いてのことです。しかも、見学に来なかったのは 1 度ではなかったとのこと。これに対して志らくさんは、「芝居の押し付けではありません。師匠に興味があるかないかという師弟の根本の部分です。弟子が師匠に対して興味がないのなら弟子である必要はありません」と言っておられました。これをニュースで目にしたとき、なるほどと腑に落ちました。私は当初、師匠を通じて K 先生の「鍼灸の技術」に興味を持っていましたが、いつしか「K 先生自身」に興味を持っていたのだなど。K 先生は趣味で小唄をやっていました。K 先生がお披露目に声をかけてくださったことが何度もありました。参加する人参加しない人がいます。K 先生が地方やアメリカでセミナーを開催する際、同行する人、しない人がいます。治療院の年末大掃除も皆に声

をかけていました。年末の忙しいとき、手伝う人、手伝わない人がいます。師弟関係とは、経験によって培った知識・技能などを伝授する関係で、伝授する側は師匠と呼ばれ、伝授される側は弟子と呼ばれます。さて、師匠はどんな弟子に伝授したいと思うだろうか。弟子はどうすれば師匠から伝授されるのでしょうか。そこには、目的や欲はなく、ただただ興味があるかどうか、どこまで興味があるかどうかだけなのかもしれません。

最後になりますが、私の K 先生への興味は、「鍼灸の技術（積聚治療）」はもちろんのこと、「K 先生自身」であり、その結果、K 先生の「ものまね」ができることにも繋がったことを自慢して、このとりとめのない話を終わりたいと思います。ご一読いただいたこと、感謝いたします。

---

### 高橋 大希(たかはし だいき)

1977 年岩手県生まれ。1999 年に、はり師・きゅう師の資格を取得。その後、鍼灸学校教員資格を得る。2001 年から東京都大田区の東京衛生学園専門学校で教鞭をとり、2022 年には粕江市にて、はりときゅうの治療院大司堂を開院。積聚治療という鍼灸治療法を 1 人でも多くの方に知ってもらい、鍼灸を通じて社会に貢献することを目的する団体である積聚会で役員を務める。

## ジュエリー作品介绍

### ゆうこ (Love Infiore)

#### ジュエリーコンセプト

あなたはそのまま、ただそこにいるだけで美しい、愛の存在。

石にはそれぞれの美しさがあり、それぞれの輝きがあります。

ひとつひとつがかけがえない存在。

それは人も同じです。

あなたの中に優しく光を当てると、愛と光で満ちていきます。

まるで花が開いて馨<sup>かぐわ</sup>しい香りが周りへと広がるように、溢れ出すあなたの光が愛とともに世界へと広がります。

自分の中に光を当てて、愛と光の世界を創る

Love Infiore(ラブ インフィオーレ)



#### ★ロードクワサイト×モルガナイト 連結タイプペンダントトップ

『私が私であるということ～そしてふたりになるということ』熱田神宮の光の帯に、女神の温かさと微笑みを感じて…

花が花として咲く美しさ 光が光として降り注ぐ美しさ

ただあるがままで、そこにあるだけで美しいということ

私が私であるということも、同じように美しいのだ

そのあるがままの「私」が「ふたり」になる

その時、それぞれの「私」が

あるがままでさらに美しく光を放つ



#### ★プレシャスオパール×ピンクトパーズ チョーカー

『交響曲～シンフォニー』

音が重なり、響き合い、新しい音生まれて、また響き合う

そこで生まれる美しい世界 歓びの世界

私たちは、それぞれが自分の内なる音を響かせる

そしてそれぞれの美しい魂の音を交響曲のように、響き合わせて、重なり合わせて

宇宙に解き放つ

この世の全てが光に包まれるその瞬間を 私たちは創り出すことができる



#### ★レインボームーンストーン×ヒマラヤ水晶原石

連結タイプペンダントトップ

『芽吹き』

天と地を結ぶもの

地から伸び、天へと繋がる

草の蔓

愛もまた、私たちから湧き上がって伸び、

天へと繋がる

### ゆうこ (Love Infiore)

●WJDA®認定デザイナー ●オーラソーマ®プラティクショナー

☆WJDA 認定デザイナー紹介ページ：<https://wjda.info/love-infiore/>

☆ジュエリーカウンセリング&オーダージュエリー承ります：<https://e-nadia.com/yuko-love-infiore-info>

## 9月の運勢

miki

### 《1月生まれ》

身の回りの断捨離や整理整頓の月です。整理整頓をしていくと辛かったことを思い出すきっかけになることもあるでしょう。あまりネガティブにフォーカスをあてることなく、瞑想などをして思考を休めるようにしてみてください。悲しみを感じることは大切ですが、ネガティブに縛られすぎないことが大切です。あたたかさを感じる心に従ってみてください。

☆ラッキーカラー【白】

全身を癒し、浄化を促します。まっさらな気持ちで心を明るく照らしてくれます。

### 《2月生まれ》

何か始めるといいスタートとなる月です。人間関係が変化していきそうです。自分の中から溢れる感情が出てくるような始まりの予感です。水に関することで、リラックスして皆と理解しあえる、ほっとできるような関係を築いていってください。眠りにつく前に、その日自分が嬉しかったことを振り返ってみてください。

☆ラッキーカラー【チョコレート】

リラックス効果もあり、体と精神に滋養を与えてくれます。

### 《3月生まれ》

何か選択をしていく月になりそうです。今少し大変な状況ですが、もう出口が見えています。周りの気まぐれな状況に振り回されず、自分を信じてください。事態を受け入れ考え抜くことも時には必要となってきます。学びを大切に、自分のやりたいことはどんどん勉強していってください。これが今の状況を抜け出すサインとなります。

☆ラッキーカラー【黄】

消化器系を浄化し、知性と精神を刺激してすばやく明晰に考えることができます。

### 《4月生まれ》

楽しいことを優先していく月です。楽しんでください。水に関係する場所がよさそうです。色々な事柄を軽い波動でやりこなしていくことが大切です。童心に戻ってワクワクすることを沢山してください。そこから自分の心の拠り所を見つけてください。土台となり、あなたを支えていてくれるでしょう。

☆ラッキーカラー【緑】

欲求不満や怒りを鎮め、心を穏やかにしてリラックス効果をもたらします。

### 《5月生まれ》

34

古いものが崩れて新しいものを築いていく月です。大変なこともある月ですので自分の力を信じて行動してください。しかし、頑張りすぎないのがポイントです。あなたはあなたの役割があります。そのことに大も小も関係ありません。なるべく広い海のような穏やかな気持ちでいられるようにしてみてください。

☆ラッキーカラー【青】

緊張感・落ち込んでいる時・興奮状態にある時に心を鎮める効果があります。

### 《6月生まれ》

変化のある月です。旅行に行くのもよし、今までと違う体験を試してみるのもいいですよ。これまでの価値観を大切に、あなたの役割を発揮していく時ですが、遊び心を大切にしてください。その反面、嫌だなど思うことや以前の自分の言動が返ってくることもあります。それも認めて自分のパワーにしてみてください。

☆ラッキーカラー【光沢】

変化変容をもたらし、心機一転の時にピッタリのカラーです。あなたのキラキラした本来の力を引き出してくれます。

### 《7月生まれ》

自分が大切に思う人と物事を育む月です。家族の月でもあります。自分のあるべき道がはっきりしてきているでしょう。何も無いところから頑張ろうとする情熱と静かに穏やかに過ごす時間の動と静をどちらもバランス良くしていってください。人と接する時も偏見なしにフラットな気持ちで接してみてください。

☆ラッキーカラー【エメラルド】

心・体・魂を鎮める色です。自己評価を高め、エネルギーを補充してくれます。

### 《8月生まれ》

自己内省の月です。プライベート重視の月なので、自分の予定をなるべく優先してください。自分のパートナーとなる人に出会いそうです。パートナーは異性とは限らず、同性だったりペットだったりします。正しい道をしっかりと進んでいるので、目指す方向だけ見ていってください。謙虚な気持ちを大切にしてください。

☆ラッキーカラー【茶】

自然の持つ癒しの力を繋ぎ、他者との間に健やかな境界線をもたらしてくれます。

### 《9月生まれ》

積極的に行動範囲を広げる月です。先祖からの負のパターンの鎖を断つ時が来ました。それには苦痛も伴うかもしれません。揺らがなくて立ち向かう気持ちも大切です。心から一緒に立ち向かってくれる仲間ができ、人との付き合い方にも変化がありそうです。

☆ラッキーカラー【緑】

35

欲求不満や怒りを鎮め、心を穏やかにしてリラックス効果をもたらします。

#### 《10月生まれ》

整理整頓・断捨離の月です。お部屋の整理もとても効果的です。あなたのバイブレーションが高まっていて、光の柱となっていくます。天からの強力なサポートが来ています。あまり自分で何かを慌てて選択しようとせず、自分の心のまま流れに任せてみてください。それは少し怖いと思うかもしれませんが、少し勇気を持ってみてください。ベストな方向へ進みますよ。

☆ラッキーカラー【アプリコット】

重いエネルギーを軽くして喜びと明るさをもたらしてくれます。

#### 《11月生まれ》

スタートの月です。何かを始めるのに最適な月になります。上手くいかない執着やキャパオーバーなことがあれば手放してみてください。今見ている事柄と違った見方をしてみてください。その気づきを与えてくれるのは自分の苦手な相手が教えてくれますよ。あなたが本来したいことには天からOKが出ています。損得ではない純粋な気持ちに従ってください。

☆ラッキーカラー【ラベンダー】

直感を鋭くし、リーダーシップを引き出してくれる色です。体と心と魂の繋がりを深めます。

#### 《12月生まれ》

選択をしていく月になりそうです。あなたの何故か苦にならず自然とできることが、あなた本来の役割になってくるのです。その事柄に大小は関係ありません。楽しく夢中になれることを大事にしてみてください。そこから素晴らしい結果がもたらされるでしょう。周りに誰かがいてくれるからこその自分があることは忘れないでください。

☆ラッキーカラー【光沢】

変化変容をもたらし、心機一転の時にピッタリのカラーです。あなたのキラキラした本来の力を引き出してくれます。

#### miki

初めまして。mikiと申します。愛知県江南市在住です。

占いやメンタル心理学を通して、当たる・当たらないではなく潜在意識と繋がり、あなたらしくまた頑張ってみようかなと思ってもらえるまでとことん寄り添っていきたくて思っております。

## 漢詩『壇の浦を過ぐ』について

萩原 正大

(白文)(1)

『過壇浦』 村上仏山

魚荘蟹舎雨為煙  
蓑笠独過壇浦辺  
千載帝魂呼不返  
春風腸断御裳川

(書き下し文)(1)

『壇の浦を過ぐ』 村上仏山

魚<sup>ギョソウ</sup>荘<sup>カイシャ</sup>蟹<sup>アメ</sup>舎<sup>クムリ</sup>雨<sup>アメ</sup>為<sup>クムリ</sup>煙<sup>アメ</sup>と<sup>アメ</sup>為<sup>クムリ</sup>る  
蓑<sup>サリュウ</sup>笠<sup>リュウ</sup>独<sup>サリュウ</sup>り<sup>リュウ</sup>過<sup>サリュウ</sup>ぐ<sup>リュウ</sup>壇<sup>サリュウ</sup>の<sup>サリュウ</sup>浦<sup>サリュウ</sup>の<sup>サリュウ</sup>辺<sup>サリュウ</sup>  
千<sup>センザイ</sup>載<sup>ザイ</sup>の<sup>ザイ</sup>帝<sup>テイ</sup>魂<sup>コン</sup>呼<sup>テイ</sup>べ<sup>コン</sup>ども<sup>テイ</sup>返<sup>コン</sup>ら<sup>コン</sup>ず  
春<sup>シュンブウ</sup>風<sup>ウウ</sup>腸<sup>ハラワタ</sup>は<sup>ハラワタ</sup>断<sup>ミキスソガワ</sup>つ<sup>ミキスソガワ</sup>御<sup>ミキスソガワ</sup>裳<sup>ミキスソガワ</sup>川<sup>ミキスソガワ</sup>

(大意)(2)

見わたせば、漁師の小屋が点々と、折からの雨にかすんでいる。ここ壇の浦のあたりを自分はただひとり蓑笠つけて通っているのである。あの幼い安徳天皇が御入水遊ばされてからはや千年、いくら呼びしても御魂はおかえりにならないのである。いま春風そよぐ御裳川のほとりにたたずめば、当時のことがしのばれて、腸はちぎれるばかりである。

(私見と鑑賞)

### I 私の問題意識

『壇の浦を過ぐ』は、私自身も青年部で出場した令和6年度全国吟詠コンクールの指定吟題の1つである。コンクールでは、出場する部(幼年部・少年部・青年部・一般一部・一般二部・一般三部。年齢による区分である)の指定吟題10題程度の中から、出場者各自が好きな吟題1題を選ぶことができる。私は『壇の浦を過ぐ』を選択して約10年ぶりにコンクールに出場し、最終成績は東京都大会14位であったが、日々の練習の合間に個人的に吟題そのものを深く探究する時間を設けていた。以下の文章はその成果の一部である。

古文・漢文不要論が叫ばれ始めた現代にあつては、漢詩は埃を被った旧時代の遺物のように思われているのかもしれない。現代の詩作の主流が口語自由詩(部分的に口語定型詩)であることも、そうした傾向に拍車をかけているように思われる。しかし、形式はともかくとして、詩というものに乗せられた思い・詩人の心に古今東西の別はないと私は確信している。漢詩など堅苦しくて古臭いと思われるかもしれないが、漢詩といえども何かしらの「思い」や「心」は必ず秘められている。このような「思い」や「心」を感覚的に、自由に読み解いてゆくアプローチがあつてもよいのではないかと私は常々考えてきた。

漢詩文化は古代中国に端を発するが、わが国でも(少なくとも公的には)『懐風藻』以来の伝統ある文化である。仏教と同様、当初は政策的に受容した側面があつたとはいえ、漢詩文化は自国の感性を取り込む形でわが国でも独自の発展を遂げてきた。『文選』や『白氏文集』、『唐詩選』など、わが国の文化的発展の基礎となった中国の漢詩集も存在する。しかし、どれほど素晴らしい文化であっても、ある程度の「新しみ」を添え続けていかなければただの骨董品に墮するのみである。今人の感性を「新しみ」として積極的に取り入れる工夫をしなければ、漢詩文化は旧時代の遺物としていづれ誰からもその価値を理解してもらえなくなってしまう。

私はこの文章全体を通して「新しみ」の添え方に関する1つの提案を試みたい。この文章は我流の鑑賞文であるが、それ以上に、ある仮説を具体化するための実験的文章なのである。「ある仮説」とは、「漢詩にまわりつく『堅苦しき』や『古臭さ』といったイメージを克服するためには、鑑賞者の自由な感覚に委ねるアプローチが有益である」というものである。この仮説の背後には美学的な問題意識も潜んでいる(IVで改めて触れる機会がある)。私の採用するアプローチの是非については歴史の審判を待つよりほかない。だが、拙文が何らかの形で漢詩文化を再評価するきっかけ作りの一助となれば望外の喜びである。

## II 詩文の探究、特に「蓑笠」について

『壇の浦を過ぐ』は1185年3月の壇ノ浦の戦いで敗れ去った平家一門と、入水により崩御された安徳天皇の菩提を弔う鎮魂詩である。作者の村上仏山先生は豊前国の儒学者にして詩人である。起句から順を追って本作の詩意を検討してみよう。

まず起句は「魚荘 蟹舎 雨 煙と為る」であり、作者の目に映じた江戸後期から明治初期にかけての壇ノ浦の情景と解される。結句の「春風」から推察するに、季節は平家滅亡の時期と重なる旧暦の3月頃ではなかったかと思う。その日は小糠雨の降りしきる少し肌寒い陽気であった。赤間関壇ノ浦は低く垂れ込めた雲に蓋われ、空と海を薄墨色に染め上げている。しとしとと降る雨は遠景を霞ませ、平家一門と安徳帝が鎮まる彼方の沖合をひっそりと隠している。漁民らも今日は浜辺に点在する家々(魚荘・蟹舎)に籠っているのだろう、付近の海上にすら釣り船は一艘も見当たらない。壇ノ浦に響き渡るのは雨が大地と水面を叩くごく密やかな音色だけである。

この雨の中、壇ノ浦の岸辺をただ独り過ぎ行く者は誰であろうか。かの者は蓑をまとい、笠を目深にかぶった旅人のように見える(「蓑笠 独り過ぐ 壇の浦の辺」(承句))。我々が本作で最も注目すべきは、この「蓑笠」という言葉がもつ意味の奥行きである。一般に、「蓑笠」とは作者自身の姿の謂であり、それ以上でもそれ以下でもないと解されてきた。たしかに、「蓑笠」を作者と捉える見解は、表題の文言と起句以降の展開から導かれる最も合理的かつ自然な解釈である。作者は旅の途上、平家終焉の地であるここ壇の浦に立ち寄り、うら寂しい景色から感ぜられる感慨のままに詩作を行ったものと推測されるからである。私もこの見解に対して異論を差し挟むつもりは毛頭ない。

他方で、私は、「蓑笠」には作者自身の姿にとどまらないより重層的な意味が詠み込まれていて考えている。作者自身の姿を詠むだけなら、(李白作『汪倫に贈る』の「李白 舟に乗って 將に行かんと欲す」のように)「仏山」という自称表現を採用して「独り過ぐ」の主語を明確化する途もあつたはずだからである。

本作の各句をその意味内容を基準に分類すると、起句と承句は情景描写のグループ、転句と結句は感情表現のグループとして大別することが可能である。これは承句における「蓑笠」の登場を境に詩が感情表現の段階に移行したことをも意味している。より直截的に言えば、転句と結句は「蓑笠」の心の叫びなのである。この心の叫びの主体を作者自身と捉えることも当然可能だが、それにしては些か強烈に過ぎる感情表現ではないだろうか。「帝魂」「呼べども返らず」「腸は断つ」という表現は、生身が一定の物理的・精神的距離感をもって古人に思いを馳せる域を超越しているように思われる。これらは古人の魂や霊的な何者かと短時間であつたとしても結びつきを得た者だからこそ紡ぎ出せる言葉ではないだろうか。つまり、「蓑笠」とは、人間である作者ではないある種の霊的な存在の介在を示唆する文言なのである。転句以下の感情表現は、人間である作者の筆を借りて、何らかの霊的な存在が自身の心情を吐露した側面があるといえるのである。

一見すると突拍子もない以上の解釈を補強し得るのは「蓑笠」という謎めいたビジュアルである。古人であれば雨の日に蓑笠姿になるのは当然と言えば当然だが、問題は詩という虚実混交の芸術表現において「蓑笠」という言葉がもたらす効果である。作者はなぜ数ある表現の中から「蓑笠」という表現を選択したのだろうか。漢詩としての平仄を整えるに相応しく、唐宋八大家の1人である柳宗元の作品(『江雪』)に既に先例(「孤舟 蓑笠の翁 独り釣る 寒江の雪」)が見える表現だったからだろうか。しかし、そもそも『江雪』における「蓑笠の翁」という表現自体、釣りをする老翁という表面的な意味以上に含蓄に富んだ表現である。左遷された柳宗元の頭の中では、同じく志半ばで疎んじられて左遷された春秋戦国時代の楚の忠臣・屈原が想起されていたのではないかと私は考えている。屈原作とされる(有力な異説がある)『漁夫の辞』では、左遷された傷心の屈原が、湘江のほとりで出会った思慮深い年老いた

漁師(「漁夫」)から柔軟に生きることの重要性を諭される。「漁夫」が屈原に語った言葉として、例えば「滄浪の水清まば以て吾が纓を濯ふべし 滄浪の水濁らば以て吾が足を濯ふべし」という詩句が挙げられる。「滄浪の水が清らかならその流れでわが冠の紐を洗おう、滄浪の水が濁っているならその流れでわが汚れた足を洗おう」という意味だが、その背後には「清廉が許される時勢・環境ならば清廉な自己を貫いてどこまでも栄達を求めればよい。佞悪な人々が多い時勢・環境ならば清廉に固執することなく、しかも汚したくないものまで彼らに差し出すことなく、適当に合わせて時を待てばよい(変えられるなら環境・生業等を変えてもよい)。時勢・環境を適切に見極めると共に、徒に悲観することなく臨機応変に生き続けることこそが肝要である」という意図が込められている。現代を生きる我々にとっても非常に含蓄に富む言葉ではないだろうか(そもそも「清廉」「佞悪」という価値判断自体、一面的なものである)。「漁夫」は世俗の迷いを超克した智者であり、あたかも湘江に宿る川の神の化身のようである。『漁夫の辞』が収められている『楚辞』はシャーマニズムの感性が色濃く残る古代中国楚地方の傑作歌謡集であり、その中には実際に湘江の二柱の女神(湘君と湘夫人)を詠った作品も含まれている(「九歌」より『湘君』と『湘夫人』)。柳宗元は、中世騎士物語に登場する隠者のような存在であり、神の化身とも捉え得る「漁夫」を「蓑笠の翁」と言い換えつつ、『楚辞』以来の理想的な人間像を描き出そうとしたのであろう。そして、今後の自らの身の処し方を「漁夫」の箴言から学ぼうとしたのであろう。『江雪』は、深山幽谷の雪景色を詠った単なる叙景詩ではなかったのである。

この私見が正しいとすれば、柳宗元があえて「蓑笠の翁」と言い換えたのはなぜだろうか。私は蓑と笠が言わば「隠れ蓑」として作用するからではないかと考えている。第三者は蓑をまとう人物の脚から上の姿態を観察することができない。そして、第三者は笠をかぶる人物の容貌を観察することができない。第三者が蓑笠姿の人物から外形的に観察できるのは、せいぜいそこに何らかの人物が存在しているということだけである。つまり、「蓑笠」とは、観察したくても観察できないもの・掴みどころがないものの象徴として人間意識に作用する結果、人間の感覚器官による把握を超えた神秘的な存在として認識されることになるのである。人間の通常の意識によっては「隠れ蓑」の下を捉えることは基本的に不可能だが、かえってその限界が「隠れ蓑」の下の人物の神秘的な性格をも含意することに繋がっているのである。本作の作者は先行する柳宗元の『江雪』を当然ご存知だったはずだが、「蓑笠の翁」から「翁」という男性的要素さえも排除することで、「蓑笠」の下の人物の属性・年齢・性別の一切を把握できないようにされた。そこに本作の独創性があると私は考えている。作者は、「蓑笠」という表現が人間意識による把握を超えた神秘的な存在として読み手に認識されることを感覚的に理解されていたのかもしれない。そのためにあえて「蓑笠」という表現を採用し、読み手に想像力を働かせる余地を与えたのではないだろうか。そして百数十年の時を経て、「蓑笠」の一語をもって、人間である作者ではない霊的な存在の介在を示唆する文言であると考える狂人が現れ出たのである。しかし、この狂人は、「蓑笠」が人間である作者自身と霊的な存在の双方を同時に意味する重層的な文言であると信じてやまないのである。

### III 「蓑笠」は何者か

それでは、この「霊的な存在」は何者であろうか。それは、①平家一門の霊魂の総体であり、②皇祖神(天照大御神)の仮の御姿である。①と②は同時に示唆される重層的な意味であり、決して二者択一のものではない。要するに、「蓑笠」とは、人間と霊的な存在の多層構造であり、具体的には作者と平家一門と皇祖神の多層構造なのである。以下では①と②の詳細を検討してゆく。

①は本作の場面設定から比較的容易に推測できる「蓑笠」の正体であろう。雨に煙る壇ノ浦をただ独り過ぎ行く「蓑笠」。その姿は異界からの使者を彷彿とさせ、一見して衆人を畏怖させる異様さである。肅々として近寄り難いこの異人は悲嘆の蓑を身にまとい、大きな笠で異形の面を隠している。『ジョジョの奇妙な冒険』第5部に登場するチャリオッツ・レクイエムの雰囲気に近いと換言すれば、一部の方にはお分かりいただけるかもしれない。「蓑笠」は詠う、「千載の帝魂 呼べども返らず」(転句)と。「千載」について、指定吟題の解説書では、平家滅亡から詩作に至るまでの時の経過と説明されている。実際には千年は経過していないものの、長い年月を経た事実をもって「千載」と形容したというのである(3)。この解釈も一理あるが、「千載の」は「帝魂」の連体修飾語と解される以上、「千年もの長きにわたる帝魂」と説明するのが本来は自然ではないか。安徳帝は8歳で崩御されている以上、「千年」と解するのは極めて不自然と思われるかもしれない。しかし、即位礼と大嘗祭を経た新天皇には天皇をして天皇ならしめる「天皇霊」が憑依するという折口信夫先生(国文学者・民俗学者)のご見解を踏まえると、安徳帝の御身体には皇祖神である天照大御神を始祖とする「天皇霊」の御魂が既に宿っていらっしやうと解することもできる。この「天皇霊」には平家滅亡当時の皇紀にして少なくとも1845年(1185+660年)もの歴史があったからこそ、「千年もの長きにわたる帝魂」と説明することができたのである。「蓑笠」が呼びかけていたのは、安徳帝ご自身の御魂であり、安徳帝の御身体に宿る「天皇霊」の御魂だったのである。

しかし、呼べども呼べども海の彼方から応答はない(ここでは「返らず」を「返答がない」と解してみた。当然、崩御された安徳帝の御魂がお帰りになるはずもない)。「蓑笠」は嘆息して「春風 腸は断つ 御裳川」(結句)と詠ずる。水面を渡って吹く浦風は霧状の雨を斜めに降らせ、潮の香りを海辺まで運んでくる。この春風に舞う滴たちは知っているのだろうか、安徳帝の波の下なる高御座を。だが風は、かの異人の頬に心なく冷たい雨を吹き付けるばかり。「蓑笠」は「御裳川」の三文字を断腸の思いで絶唱するのである。

②の検討に移る前に、この「御裳川」の意義について若干考察してみよう。先に「御裳川」について考察しておくことが②の理解にとって有益だからである。「御裳川」という地名はみもすそ川町という形で現在も山口県下関市に健在であるが、その由来は「二位尼」平時子の辞世「今ぞ知る みもすそ川の 御ながれ 波の下にも みやこありとは」とされている(入水した平家の女官たちの裳裾が河口部に流れ着いたことから「御裳裾川」と称したという俗説があ

るが(私自身も幼い時分にそのように教わっている)、地理的な観点も含めて真偽のほどは定かでない。この歌における「みもすそ川」とは、伊勢の皇大神宮(内宮)の御神域を流れる五十鈴川の別称(「御裳濯川」)。初代齋宮・倭姫命が御裳の裾を洗い清められたことに因む)であり、皇統の暗喩である。「倭姫命所縁の御裳濯川の御流れ、ひいては内宮の天照大御神を皇祖と仰ぐ皇統の御流れ」という趣旨である。二位尼は「皇統の御流れは壇ノ浦の波の下に広がる都に水の如く脈々と続いて絶えることはありません(入水しても崩ずることはないのです)」という優しい嘘をつかれた。『平家物語』の記述を読む限り、安德帝は恐らく全てをご存知だったが、結局は祖母上と共に入水される運命に飲み込まれてしまわれたのである。「蓑笠」は、入水された幼帝の御魂の行方に思いを馳せ、二位尼をして優しい嘘をつく状況に追い込ましめた運命の悪戯を憎み、高倉天皇とその中宮・建礼門院平徳子との間の嫡流の断絶を悲しむがゆえに慨嘆するのであった。①の「蓑笠」は平家一門の靈魂の総体であるから、そこには帝を崩御させたことに対する一門全体としての自責の念もあったのかもしれない。

そして、「みもすそ川の 御ながれ」を皇統と解するならば、その源流に坐すのはほかならぬ皇祖神である。私は安德帝にとっては祖霊にあたる皇祖神の介在についても「蓑笠」のワードから推測可能であると考えている。これが②である。「蓑笠」は皇御孫命(瓊瓊杵尊)の子孫であり、子孫である限りは斉しくわが子ともいえる安德帝の死を悼み、海原に消えたその御魂を思って御声をかけられた。降りしきる雨こそわが涙、立つさぎ波こそわが心。一時的とはいえ「天皇霊」として一体化した者は皆愛しいわが子である。能『隅田川』における梅若丸の母のように、失ったわが子を思う母の悲嘆は深い。起句で示された壇ノ浦の情景も全てこの尊い御母の心象風景だったのである。皇大神宮別宮第一位の荒祭宮の御祭神である天照大御神荒御魂をもって水の女神(大祓詞では「速川の瀬に坐す」と説明される)である瀬織津比賣と解する見解を踏まえると、太陽神であるはずの天照大御神と水神との関連性も見えてくる。思えば本作には「雨」「浦」「川」という水を意識させる文言も多い。

それでは、なぜ皇祖神は「蓑笠」姿なのだろうか。「蓑笠」には、前述のように、人間の感覚器官による把握を超えた神秘的な存在の介在を示唆する意義があった。しかし、これとは若干異なる理屈を経由すれば、尊い祖先神の介在を示唆する意義をも見出し得るのである。ここで参照したいのが、前述の折口信夫先生が提唱された「まれびと」の概念である。先生によれば、「まれびと」とは「客人(まろうど)」のことであるが、その使用は古くは訪れることの相当程度稀な賓客の呼称に限られ、その起源は時を定めて来訪する神の呼称であったという。特に沖縄諸島周辺における民間信仰の事例を多数踏まえられた上で、先生はこうした神の原型は海の彼方にある理想郷・彼岸である常世の国から基本的には周期的に来訪する祖霊であったと結論づけていらっしゃる。また、人々が平野部に移住した後も、場合によっては理想郷の所在が山や天へと変遷し、或いは仏教的なテイスト(極楽浄土や盂蘭盆会など)をも併せ持つ形でこのような祖霊信仰は継続されてきたと説明していらっしゃる。「まれびと」たる祖霊が土地の強力な精霊を屈服させて寿福をもたらすことを誓約させる」という共通の構造が様々な予祝芸

能や神事等に見られることも先生は紹介していらっしゃるが、紙幅の都合上残念ながら割愛する(いずれ別稿で詳しく紹介する機会があるかもしれない)(4)。

ここで注目すべきは、「まれびと」の通常想定し得る服装である。先生は、高天原を放逐された際の須佐之男命の服装や、神武天皇の命を受けて天香具山の埴土を密かに取りに向かう際の椎根津彦と弟猾の変装が共に「蓑笠」姿であった点を指摘されつつ、以下のように説明される。「蓑笠は、後世農人の常用品と専ら考えられて居るが、古代人にとっては、一つの変相服装でもある。笠を頂き蓑を纏う事が、人格を離れて神格に入る手段であったと見るべき痕跡がある。」(5)「今も民間信仰に、田の神或は其系統の社の神の、蓑笠を着けたのが多いのは、理由のあることである。遠い国から旅をして来る神なるが故に、風雨・潮水を凌ぐ為の約束的の服装だと考えられ、それから蓑笠を神のしるしとする様になり、此を着ることが神格を得る所以だと思う様になったのである。」(6)

以上を総合すると、「まれびと」とは基本的には周期的に遠方より来訪する賓客にして祖先神であり、その服装は通常「蓑笠」姿であったということになる。前記②によれば、「靈的な存在」としての「蓑笠」は皇祖神の仮の御姿であった。皇祖神は安德帝の御魂を思い、今回に限っては臨時に壇ノ浦に来訪されていた「まれびと」だったわけである。皇祖神たる天照大御神が姿形を変えてこの世に顕現された「前例」もある。中世の神仏習合思想において、日向に下生したと説明される雨宝童子がそれである。雨宝童子の本地は大日如来、垂迹は天照大御神である。皇祖神もまた「変身する神」なのである。方便として「蓑笠」姿になっていらっしゃるとしても不思議はない。

かくして我々後代の鑑賞者には、作者としての「蓑笠」・平家一門としての「蓑笠」・皇祖神としての「蓑笠」という三者三様の立場に共感しながら本作を鑑賞する途が開かれたのである。互いに交わるはずもない三者を結びつけたのは純粋な鎮魂の思いであった。人間と靈的な存在が互いに融合しつつ共鳴したのはほんのひと時であったかもしれない。しかし、感動は詩という形で今日まで残された。我々もまた、我々なりの鎮魂の思いで本作に向き合うことで「蓑笠」に溶け込むことができる。古いものと新しいものを真に共鳴させるのは理屈ではなく感性なのである。

#### IV 自由な鑑賞とこれからの伝統文化について

さて、以上の文章の筆致はある意味挑戦的である。例えば、本作の作者が折口説を踏まえて詩作していたと解することは物理的に不可能であるにもかかわらず、「天皇霊」説や「まれびと」概念をどうして持ち出し得るのか。私個人としては、「折口説を検討することで『皇祖神の介在』という個人的な感覚をより分かりやすく説明することができる」「折口説を検討すれば皇祖神が仮に「蓑笠」姿でいらっしゃることを本作から感得することも現代人にとっては不可能ではなくなる」という立場に立つものであるが、この見解は作者の置かれた状況に忠実な解釈者であろうとする立場に立てば(立たないとしても)暴論であり冒瀆である。他方で、これ

こそが歴史的な検証と自由な鑑賞との相違であり、作者の置かれた状況を踏まえた特定の文脈の下では一定の「正解」又は「最適解」が存在するとしてもなお、自由な鑑賞が許されてよい理由なのである。

私はいわゆる「理想的観賞者」を是とする鑑賞態度を批判するものではない。「理想的観賞者」が導き出した「正解」又は「最適解」が多くの場合議論の出発点になるからである(この文章も「蓑笠」を作者自身と捉える通説を出発点としている)。その意味で「理想的観賞者」は必要不可欠である。しかし、「理想的観賞者」の範疇に収まらない鑑賞を排斥する態度は、芸術の門戸を狭め長期的にはその衰退を招来することにもなりかねない。俗にいう「価値観の多様化」により、「正解」又は「最適解」を示すことがある種の知性主義として批判されかねない時世にあっては、自由な鑑賞を広く許容することが(とりわけ放置すれば衰退しかねないカテゴリーにおいては)活発な議論や創作活動を促進し、政策的にも大変有益であると私は考えている(暗に拙文の主張を受容せよと要求しているわけではない。拙文の方向性はあくまで「新しみ」の一例にすぎず、叩き台にすぎないからである)。これは鑑賞の場面にとどまらず、創作の場面においても同様にいえることである(但し、ここでは創作については深入りしない)。そこにあるのは伝統と革新の共存である。懐古主義でも迎合主義でもない。革新から門に入り、伝統を学ぶ道があってもよいのである。そして現代は、一人ひとりが革新者であり得る時代である。一人ひとりがあらゆる制約を受けることなく鑑賞することを許された時代である。各人がもたらし得る個性ある「新しみ」を一笑に付することなく何らかの形で取り入れる土壌を確立できた伝統文化は、この時代にあっても必ず生き残ることができる。これが今の時代に相応しいある種の倫理観であり、伝統文化の生存戦略なのではないか。Iで私がある程度の「新しみ」を添え続けていく必要性を説いたのも、「新しみ」を許容する土壌作りの議論に最終的には帰着する。

美学上の議論にとどまらず、文化政策的な議論にも若干踏み込む形となったが、まとまりのなさもまた雑誌の記事としては許容されよう。読者諸賢は『壇の浦を過ぐ』をどのように解釈されるだろうか。是非とも「正解」に固執することなく、自由に鑑賞して見ていただきたい。

#### 引用・参考文献

- (1) 全日本詩吟研究会編『アクセント付 吟詠名詩集第一集』第5版、株式会社創文社、1991年、61頁の表記を参照した。旧字体は新字体に改めた。
- (2) 『令和六年度 全国吟詠コンクール指定吟題 青年の部・一般の部』(未刊行)の通釈部分を引用した。
- (3) 同上書の語釈部分を参照した。
- (4) 本段落の記述は、折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集 第一巻 古代研究(國文學篇)』、「國文学の発生(第三稿) まれびとの意義」、中公文庫、1975年、3-62頁を参照した。
- (5) 同上書の13頁を引用した。旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。

- (6) 同上書の14頁を引用した。旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。

---

#### 萩原 正大(はぎわら まさひろ)

2000年東京都生まれ。上智大学法学部法律学科卒。

民俗学への個人的な関心から、都市における「伝統の創造」について考えを巡らせている。

趣味は詩吟・クラシック音楽鑑賞・読書・ワイヤージュエリー制作などなど。

最近のお気に入り是指揮者のイーゴリ・マルケヴィチ。

### 今号の表紙写真



熱田神宮境内の大楠

(撮影日：2024年2月9日/撮影者：萩原正大)

体調不良に苦しんでいた当時、縁あって熱田神宮に初めて参拝した。

この時の参拝で何かが変わった。体調も後に快方に向かった。『たね』創刊の着想が形になった原点は

熱田神宮への参拝だったのである。御神恩には感謝してもしきれない。

尾張国造と大和政権との関わりは深い。私はとりわけ建稲種命と宮簀媛命のご兄妹に注目している。

宮簀媛命は日本武尊の御歌に「火上姉子(ひかみあねご又はほのかみあねこ)」と詠われた尊の妃である。氷上

姉子神社(熱田神宮摂社)の境内末社元宮の石碑によれば、「倭武天皇」の「皇妃」にあたる御方だ。

熱田神宮の見解が『常陸国風土記』と同一だったとは予想外。いずれ東国におけるヤマトタケルをテーマとする

論考を寄稿してみたい。古代の「あづまのくに」は当然一枚岩ではなかっただろうが、私は

そこにロマンと様々な可能性を感じている。日本武尊ないし倭武天皇も大きな影響を与えていたはずだ。

(萩原正大)

### 編集後記

『たね』創刊のご案内と寄稿の募集を開始したのが2024年3月1日でした。個人的な多忙も相まって、当初の予定から2ヶ月以上遅れての創刊となりましたこと、深くお詫び申し上げます。また、私の企画に賛同してくださった皆様、創刊号に寄稿してくださった皆様に深く感謝申し上げます。皆様に背中を押していただいたおかげで創刊号の刊行が実現いたしました。

引き続き『たね』をどうぞよろしくお願いいたします。

(萩原正大)

雑誌 たね 創刊号

令和6年9月17日 発行

発行者 萩原 正大  
[magazine.tane.edit@gmail.com](mailto:magazine.tane.edit@gmail.com)  
発行所 株式会社 PUBFUN  
パブファンセルフ  
<https://pubfun.jp/self>

本誌に掲載された著作物の著作権は各著作物の著作者に帰属します。  
本誌は全体として編集著作物に該当し、その著作権は発行者に帰属します。  
著作権法上の例外を除き、本誌に掲載された文章・画像等を無断で使用することを禁じます。